

行田 歴史系譜 275

歴史を語るこの「いっぴん」
博物館の収蔵庫から

11

小川一真の少年時代の手紙

個人蔵

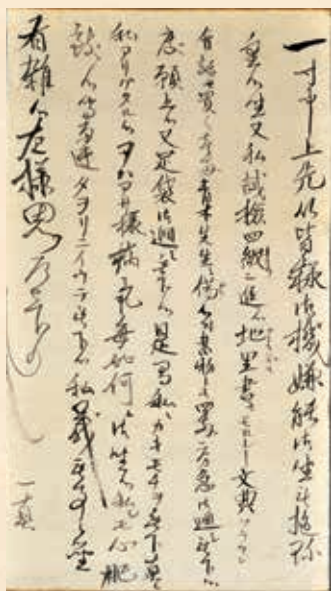
小川一真は万延元年（1860）、忍藩士原田庄左衛門の次男として忍城下に生まれ、幼少のとき同じ藩士の小川家の養子となりました。22歳のとき写真技術習得のため単身渡米し、帰国後は写真家として活躍するとともに、写真製版を実用化し多くの印刷物を刊行しました。その中には日清戦争や日露戦争、明治天皇の大葬の礼などを記録した写真帖も含まれています。また、千円札に使用された夏目漱石の肖像写真を撮影したことも知られています。

写真の手紙は少年時代の小川一真が書いたものです。一真は藩校の一つである培根堂で学んだ後、12歳のときに東京に出て有馬私学校に入学しました。この学校は元久留米藩主有馬頼威が明治5年（1872）に設立した私立学校で、英語の他漢学や洋算などを

教えていました。教師の中には、元忍藩士で藩校洋学館の英語教師だった青木田治（輔清）もいました。

手紙の内容は、教科書の購入代金を青木先生から借りたので至急送ってほしいことや、足袋も送ってほしいこと、祖母の病気の具合を心配していることなどが書かれています。手紙の本紙に年月日や宛名は記されていませんが、年代は有馬私学校に入学した明治6年、宛先は国元にいる実父かと思われれます。

教師の一人に写真が趣味の英国人ケンノンがいました。彼は時々撮影のために町へ出掛けるのですが、当時の人々は写真を撮られることに抵抗があり、レンズを向けると石を投げつけられました。そこで、ケンノンは用心棒兼通訳として一真を連れて行くようになり、写真に興味を持った一真に英語の『写真術の手順と方法』を貸してくれました。



小川一真の手紙

このときの体験が後に写真家を目指すきっかけとなりました。近代日本を代表する写真家の一人である一真のルーツは、少年時代の学校生活にあったのです。

（郷土博物館 鈴木紀三雄）

特定非営利活動法人 行田観光物産会

「行田の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい」という熱い思いを胸に活動しているのが特定非営利活動法人行田観光物産会です。

同法人は映画「のぼうの城」公開を機に、平成23年4月に市内の商店、飲食店、農家などさまざまな分野の事業者が集まり設立されました。「見る」「食べる」「買う」に加え「体験する」の4要素を観光の柱とし、多岐にわたる事業を展開。各会員の専門分野を生かした商品開発や、地元目線で選んだ名所、体験事業を紹介した観光ガイド「行田の迷い方」の発行、商店街と協力し昔ながらの縁日を再現した「行田あきんど市」の開催などを行ってきました。魅力発信から商店街の活性化につながる活動が評価され、平成27年には県の「元気な商店街応援事業表彰」を受賞しました。

事業者同士のネットワークと結束力が強みの同法人。今後も新たなアイデアで行田を盛り上げてくれることでしょう。

【代表理事】戸塚 昌利 【電話番号】556-3467

つながる ひろがる みんなのチカラ

～市民公益活動団体紹介～②



多くの人出でにぎわった「行田あきんど市」

今月の表紙

1月8日、新成人を祝う会が産業文化会館ホールで行われました。

今年この式典に参加した新成人は684人。会場前では、華やかな振袖や真新しいスーツに身を包んだ新成人が友達との再会を喜んでいました。式典では、中学時代の思い出を振り返るスライドショーや豪華景品が当たる抽選会が行われ、大いに盛り上がりました。

- 市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。
- 市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
- 市報をダイジェスト版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。



市報ぎょうだは再生紙を使用しています